

おお大勝利

平成 23 年度山形サッカー部報第 24 号 (1 月 9 日)

サッカー部保護者の皆様、OBの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

あけましておめでとうございます

皆さん、明けましておめでとうございます。本年も昨年同様のご支援を何卒よろしくお願いたします。

さて、平成 23 年山形東は各種トーナメント、リーグ戦、いずれも苦しい戦いの連続でした。主だった戦績と言ったら第二回進学校大会（山交杯）優勝くらいなもの。平成 24 年はスカッと爽やかな風を皆様にお届けしたいものです。選手ともども精進いたしますので、応援よろしくお願いたします。

先日（1月6日、7日）二十歳を迎えるOB2名が成人式に出るために帰郷し、職員室を訪れてくれました。四方山話の中でもやはり話題になるのは、今年（来春）のチームはどうか、ということ。OBはやはり後輩の活躍を楽しみにしていることを実感。**現役生諸君！もちろん諸君は自分のため（自分たちのため）サッカーに励んで良い¹のですが、多くの方が諸君の喜びを自分の喜びとしているという事実の重みは噛みしめてほしいものです。**

昨年は、震災とそれに伴う原発事故の問題があり、山形の隣県である岩手・宮城・福島が多大な被害を受けました（もちろん茨城、千葉も）。「普通の生活」がままならない中、スポーツをすることの意味を考えさせられた一年でした。震災当初は、**衣食住が整わないのにスポーツにいそしむなど不謹慎である**、という思いが深くありました。山形は、隣県とは比べものにならないくらい少ない被害で済みましたので、衣食住が整わなかったわけではありませんが、**隣人が衣食住の欠如で苦しんでいる中、「気晴らし」を原義とするスポーツに熱くなるなど、他者への想像力を欠いた行為のように思われました**。そして半年一年くらい、活動休止になるのではないかと不安になったものです。

しかし、被災地の子どもたちが、慰問に訪れた各種スポーツの専門家と汗を流し「ようやく笑顔を取り戻しました」などという報に接するにつけ、**観るにせよやるにせよ、子どもたちの笑顔にとって、スポーツは衣食住と同様に不可欠なものではないか**、ということに気づかされました。もちろん、スポーツと衣食住を同列に論じるのは、スポーツにとってひいきの引き倒しかもしれませんが、衣食住がままならないからこそスポーツという気晴らしが必要であり、子どもたちに勇気と希望を取り戻させる一つの有効な方法のように思われました。“Man shall not live on bread alone（人はパンのみにて生きるにあらず）”とは新約聖書の有名な言葉ですが、パンと同様に【スポーツという名の希望】もなくってはならないものなのだとということに気づかされた、そんな一年でもありました。

平成 24 年は子どもたちの笑顔が咲き誇る、そんな一年であってほしいし、そんな一年

¹ 逆に、高校生が誰かのためにサッカーをやっているとしたら、それはそれで考えものです。

にしたい、と年頭に当たり強く希望いたします。

納会 例年の通り 大盛況

12月22日(木)18:00より、なかじま商店にて、OB会主催の恒例の納会が開催されました。納会はかれこれ25年ほどこのなかじま商店にて続けて開催されており、OB会の方々が現役諸君にすき焼きをごちそうしながら、一年を振り返る会です²。山東からは選手・マネージャー・顧問合わせて45名参加し、OB会からは5名参加して頂き賑やかに一年を納めてまいりました。

清野会長から、昨年来の三年生の活躍に会長自身勇気をもらった、後は受験頑張れとの励ましの言葉を頂戴してから、恒例の優秀選手5名の発表。3年生選手9名中5名の選考なので例年より簡単に思われるかもしれませんが、実質的に選考に当たった顧問の立場からすると、少なくとも昨年より悩んで選考された5名です(受賞者は下の通り)。結託した3年生の意地悪連中³から20:00納会スタートと嘘を教えられていた大築は、最初の受賞者だったにもかかわらず、名前が発表されても会場にはいない、というハプニング。大築いない中どうしよう、という15秒くらいの沈黙の中、ドタドタと階段を駆け上がる音が。どうやら感づいて?急いで現れた模様。その後つつがなく授与式が終わり、後は乾杯。宴のスタート。

毎年のことながら、生徒諸君はきれいに鍋を作るグループもあれば、花より団子とばかりに見た目度外視の鍋を作るグループもあり様々。納会に間に合わせるようにマネージャーが作成した「山東サッカー 平成23年の記録」⁴を見ながら、すき焼きを頬張り、四方山話に花を咲かせました。

OBの皆さま全員から一言お言葉を頂戴したのですが、顧問今野の「今年の三年生は体育会として恥ずかしくない立派なオフザピッチの伝統を作った」という言葉を受けて、挨拶の励行等「体育会的気質がありよろしい」と仰ったOBがいらしたと思えば、返す刀で、次のOBの方が「俺は体育会系が(という言葉に表される個性を圧殺する権威主義が)大っきらいだから、体育会に染まらず、のびのび頑張れ」と発言され、一つの意見に偏らないバランスのとれたOBの方々のチームワークの良さが発揮されました。

最後は、あつという間だから頑張れとの3年生多田前部長の激励を受けて、2年生副部長ヤマト⁵が来年の抱負を述べ、締めとなりました。「3年生は早く帰って勉強しなさい」と言って別れましたが、ちゃんとやったのでしょうかね～。3年生も久しぶりにせつかく集まったのにすぐ別れるなんて、名残惜しそうにしているように見えました。

その後、OB5名および顧問2名は近くのお蕎麦屋さんでの恒例の二次会への移動となり、楽しいひと時part2となりました。OB会の皆さま、ありがとうございました(もちろん一次会を含めて、というか一次会に対して)。

² 前顧問の渡辺晃先生が現役の時に、初めてなかじま商店にて納会が開催されたそうです。その後、3年ほど別会場にて行われたこともありましたが、それ以外はずっとこのお店にてすき焼きを食べてきたそうです。ちなみに私今野も、高校時代はすき焼きをごちそうになりました。

³ 別に司令塔がいるという可能性は否定できません。

⁴ この記録は、マネージャーがスコアやシュート数などの数字を載せているばかりでなく、選評も書かれています。書いてるのは当然・・・マネージャーです。山東サッカー部のマネージャーのレベルの高さがこの記録を読むとわかります。

⁵ 部長のショータがT大学のオープンキャンパス出席により欠席となったため。

平成 23 年優秀選手

大築郷	この代の象徴といったらこの選手。技術的に稚拙であり、1年次はすべてのパスが敵に真っ直ぐ渡るものだから、「敵にパスしろ(そうすれば味方に渡るかも)」との指示を出したことが、一度ならずある。技術の拙さをハートの強さで補う、『キャプテン翼』でいうなら石崎君タイプのディフェンダー。守備では体ごと相手にぶつかり、しばしばPKを与えたが、窮地に際して体を張ってくれる信頼のおける選手であった。2年から3年にかけて一度も部活を休まず、皆勤賞を授与された。宿泊を伴う遠征時に学力向上のため顧問部屋でいつも学習させられていたが、毎度、学習の話が恋愛の話になって行ったのも良い思い出である。今後は、志望を達成するため、根性を見せることを期待している。
田嶋乾	この学年で一人、1年次より(3年チームの)ピッチに立った選手。華麗な技術をほこるタイプではないが、堅実なボールワークと状況判断の早さ(的確さ)により、ボランチとして活躍。球際でのがんばりにおいても評価の高い選手だが、周りがよく見えるクレバーなところが最もすばらしい。トラップ、キック、ドリブルというボールを使った基礎的な部分で未熟なところがあり、決して巧い選手ではなかった点が悔やまれる。ただ、状況判断の早さ(的確さ)の点では、MFとして、顧問の最高評価を与えてよい選手である。サッカー偏差値の高さに見合った学力をいまだ獲得していないが、学習においてもクレバーさを見せてくれることをひそかに期待している。
武田有人	中学時代卓球部に所属し、サッカー経験の少ないハンデを背負いつつひたむきに練習に取り組んだ姿が、まず尊い。フィジカルはないが、「出し惜しみ」することなく全力を尽くす選手であり、彼となら同じチームを組んでもいいと何度遠藤前顧問と話し合ったかわからない。愚直さと持久力があるため、相手をマークさせると粘り強く、彼がやられたのなら仕方がないと顧問に思わせる信頼感があった。今後は東京にて、チャラ男君などには絶対ならず、麻雀ばかりせず、まじめに勉学に励んでほしい。
多田健人	もともとFW経験者であったが、チーム事情により、1年次よりCDFを務め、応用力の高さを見せた。スピード、高さ、巧さともに最高レベルではないものの、すべての「項目」にて高い評価を得ることのできる選手。決して器用貧乏ではない、質の高さがあった。「自分の学年」になってからは本職のFWを務め、CDFにおいて培った1対1の強さを武器にゴールを量産。特に圧倒的劣勢を強いられた県新人の東海戦において、延長にて独走の逆転ゴールを冷静に決めたシーンが忘れられない。これまでリーダーになったことがなかったが、背中で語る主将として、チームを牽引した功績も大きい。
斎藤大三	ながらく膝の怪我に苦しみ、「ガラスの膝」と呼ばれ、1年の後半から2年の新人戦くらいまでを棒に振った。手術し膝が癒えてからはFWとしての得点能力が爆発し、2年次の選手権では準々決勝鶴工戦で2得点、準決勝羽黒戦でも2得点し、昨年の選手権での山東の躍進のまさに原動力となった。体は大きい足がとても遅く、「一人逆風」とよく言われたが、カルロス(またはカル)というあだ名が示すように、リズムが南米的(?)で常人と異なり、特徴的なプレーをする選手であった。優しい性格で、退部する選手を一番気遣っていたのも彼であった。

高校サッカー選手権を観戦して

年末年始、例年通り私(今野)は妻の実家のある埼玉県で過ごしました。その「地の利」

を生かして、毎年、全国高校サッカー選手権を観戦に行っております。今回も行ってきました。12月31日**浦和東-那覇西、清水商-ルーテル学院** (@埼玉スタジアム)、1月2日**矢板中央-高川学園、近大付属-聖和学園** (@NACK5 スタジアム大宮)、1月3日**矢板中央-国学院久我山、大分-青森山田** (@埼玉スタジアム) の計6試合 (左側が勝者)。

一番手に汗を握った (応援熱が入った) のは、山形東が毎年練習ゲームをお願いしている聖和学園の試合。初戦勝ち上がった地元浦和東の応援に行きたかったであろう義父に、「面白い (特徴的な) サッカーをするからは是非観た方がいいですよ」とお勧めして、ともにNACK5に駆け付けました。試合は、早々にCDFのコントロールミスから失点した聖和が徐々に本領を発揮し、**次から次へとドリブル突破 (ドリブル⇒ヒールによるスイッチ⇒ドリブル) で敵ディフェンスを幻惑。また、ボールを奪われても、バルサばりのチェイシングにより複数人でボールを奪い返し、攻めまくる。**同点に追い付き、押せ押せとなりますが、**やはり全国レベルの大会では、散発的なカウンターアタックも、アタッカーに技術があるため、容易にゴール前まで運ばれてしまう。**ここが東北レベルと違うところ。近大付属が何度か聖和ゴールを脅かす。ただ、観客の注目を一身に浴びるのが、**聖和の148cmのソータ君。**私がこれまで彼のプレーを見た中で最もキレのある動きを示しており、観客を沸かせる沸かせる。聖和応援席からは「ソ、ソ、ソータイム、ソソソソソータイム」が鳴り響く (これ、しばらく耳から離れませんでした)。しかし、魅せるサッカーも冷徹な勝負の世界では、栄冠を勝ち取ることができず。中盤で不用意にボールを奪われ、カウンターアタックから失点を喫し、結局1-2の敗戦。ん~とてつもなく残念。もう一つ上の山でも聖和の応援がしたかった! 自分たちの主義に殉じた、という印象の敗戦でした。

東北のチームなので青森山田も応援しましたが、何か元気なく、淡々と大分の軍門に下ったの敗戦との印象。プレミアリーグ EAST (プリンスリーグの上の全国リーグ) にてJの下部組織などの並み居る強豪チームに伍して戦い、残留を決めた青森山田なので、力はずっともっとあるんだと思いますが、終始本来の力を出せずじまい。ボールポゼッションでは上回ったものの決定的なシュートの数でも大分に圧倒されておりました。幅を使って攻めようとの方針は感じましたが、ボランチの選手がボールをアウトサイドに散らすだけで、FWを追い越したり、ドリブルにより中央で数的優位を作ったり、サイドハーフとポジションチェンジするような、相手のマークをかく乱させる攻撃ができなかったことが、敗因と見ました。幅広く攻めているので、1対1で圧倒すれば容易にゴールに近づくのですが、大分のディフェンスはGKも含め鍛え抜かれておりました。**大分のサッカーは縦にかなり早いので、日本サッカー協会的にはお勧めのサッカーではないんだと思いますが、青森山田に力を出させなかった守備重視のサッカーとそれだけでアタッカーが複数常にDFラインの裏を狙っている攻撃的な姿勢は、非常に印象深かったです (DFのロングフィードの正確さも含め)。**いろいろなチームがあるからサッカーが面白いんであって、サッカーの質を上目線で批判してくる雑音に耳を貸さず頑張してほしい、今後も応援したいと思いました。

この2試合に典型的だったのですが、守備的に戦いつつもアタッカーを相手DFラインに複数 (ときに3枚ほど) 残し、カウンターに厚みを作るチーム戦術が印象的でした。レア・マドリーは自陣で守備をしている時間も3枚のアタッカーを前線に残し逆襲に備えさせておく、と何かで聞いたことがあります。その戦術を高校サッカーで観ることができた思いでした。守備的に戦うとどうしても守備の人数を増やそうとして、攻め手を欠くことになりがちなんですがね~。新しい発見でした。